

“こどもピースサミット 2023”

平和の意見文集



平和の意見発表会

令和5年6月10日（土）

西区民文化センター

広島市教育委員会

へいわ ちか 平和への誓い

みなさんにとって「平和」とは何ですか。

あらし せんそう
争いや戦争がないこと。

さべつ ちが みと あ
差別をせず、違いを認め合うこと。

わるくち い えがお
悪口を言ったり、けんかをしたりせず、みんなが笑顔になれること。

み ちか へいわ
身近なところにも、たくさんの平和があります。

しょうわ ねん ねん がつむいか ごぜん じ ふん
昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

みみ をさくような爆音、肌が焼けるほどの熱。

ひぶ た き ち かかも う したい
皮膚が垂れ下がり、血だらけとなって川面に浮かぶ死体。

こ ども の なまえ を 呼び、「目を開けて。目を開けて。」と、叫び続ける母親。

たった一発の爆弾により、一瞬にして広島のみちは破壊され、悲しみで埋め尽くされました。

「なぜ、自分は生き残ったのか。」

なかま うしな わたし そうそ ふ い じぶん せ
仲間を失った私の曾祖父は、そう言って自分を責めました。

げんし ぼくだん い の ひとびと こころ ふか きず お
原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深い傷を負わせ、

生きていくことへの苦しみを与え続けたのです。

あれから78年が経ちました。

いま ひろしま みどりゆた えがお
今の広島は緑豊かで笑顔あふれるまちとなりました。

「生き残ってくれてありがとうございます。」

いのち いま わたし い
命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。

わたし
私たちにもできることがあります。

じぶん おも つた まえ あいて きも かんが
自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを考えること。

とも
友だちのよいところを見つけること。

みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。

いま へいわ おも ひと
今、平和への思いを一つにするときです。

ひばくしゃ おも じぶんごと う と じぶん こと ぼ つた
被爆者の思いを自分事として受け止め、自分の言葉で伝えていきます。

み ちか へいわ ひと ひと ひとりひとり こうどう
身近にある平和をつないでいくために、一人一人が行動していきます。

だれ へいわ おも みらい ひろしま い わたし
誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちがつくっていきます。

れいわ ねん ねん がつむいか
令和5年（2023年）8月6日

こども だいひょう
こども代表

ひろしま しりつうした しょうがっこう
広島市立牛田小学校

ねん
6年

かつおか
勝岡

えれな
英玲奈

ひろしま しりついつか いちひがし しょうがっこう
広島市立五日市東小学校

ねん
6年

よねひろ
米廣

ともる
朋留

も く じ



名 前	校 名	発 表 テ ー マ	ページ
田邊 さら	大塚小学校	私たちが、未来へと	1
高橋 琉偉	真亀小学校	ともに	3
谷村 健太郎	中野小学校	波紋のように、広がれ！平和	5
佐藤 心優	五日市観音小学校	だれもが幸せと思える日を目指して	7
米廣 朋留	五日市東小学校	平和を当たり前	9
津崎 藍衣	彩が丘小学校	伝えたい	11
竹下 健太	石内北小学校	戦争の意味	13
森友 優成	幟町小学校	平和にかける思い	15
川瀬 春美	袋町小学校	「いつも通り」が続くために	17
河村 真希	吉島小学校	小さな記憶 大きな悲しみ	19
岡村 颯祐	東浄小学校	世界平和を当たり前	21
上野 美紅	中山小学校	宝物	23
小川 暁	早稲田小学校	わたしたちの使命	25
勝岡 英玲奈	牛田小学校	私にできること	27
河野 泰士	尾長小学校	立ち上がる被爆者、立ち上がるぼくたち	29
松重 純怜	段原小学校	伝えつないでいく	31
小西 咲功	皆実小学校	被爆地で生きる僕たち	33
宮垣 颯	広島大学附属小学校	私の知らなかった戦争	35
野上 若葉	広島大学附属東雲小学校	平和のために今できること	37
金坂 康誠	古田小学校	語り継ぐ ヒロシマ	39



わたし
私たちが、未来へと

ひろしましりつおおづかしやうがっこう たなべ
広島市立大塚小学校 田邊 らら

「さあ^{つぎ}次は、あなた^{たち}達の番^{ばん}です。」

これは、かじやさんというひばく^{しゃ}者^{かた}の方^{ことば}の言葉^{わたし}です。私は、このかじやさん^{ことば}の言葉^きを聞いて、次^{つぎ}は私^{わたし}達^{たち}が平和^{へいわ}への思い^{おも}や願い^{ねが}を未来^{みらい}に伝^{つた}えていかないと^{つよ}いけないと強く^{こころ}心に思^{おも}いました。

今^{いま}の私^{わたし}達は、当^あたり前^{まえ}のように、毎^{まい}日^{にち}学^が校^{こう}に通^{かよ}って勉^{べん}強^{きやう}をし、ごはんを食^たべてお風^{ふう}呂^ろに入^{はい}り、安^{あん}心^{しん}してねむることができ^せます。けれど、世^せ界^{かい}の現^{げん}実^{じつ}を見^みると、このよう^{せい}な生^{かつ}活^くがで^{くに}きない国^{くに}がまだた^おくさんあり^おます。ニユースで大^おき^おく報^{ほう}道^{どう}され^はてい^はるロシ^はアとウク^はライ^とナだ^とけで^となく、ミ^はヤ^んマ^ーや発^は展^{てん}途^と上^{じやう}国^{こく}でも、き^よがや戦^{せん}争^{そう}が絶^たえま^せん。こ^よんな世^{なか}の中^くでは国^{くに}が成^{せい}長^{ちやう}しま^せん。私^{わたし}は世^よの中^{なか}の戦^{せん}争^{そう}がな^せく^{かい}なり、世^は界^{かい}中^{じゅう}が花^{はな}のよう^えな笑^え顔^{がお}であ^えふれるよう^えにしたい^えのです。

そのた^{わたし}めに私^{いま}は今^{まご}、「ひろしまの孫^{はい}たち^{えん}」とい^{はい}うグ^{えん}ル^んー^きプに入^{はい}り、演^{えん}げ^きで^き原^{げん}子^し爆^{ぼく}弾^{だん}のお^{へい}そ^ろし^さや平^{たい}和^{せつ}の大^じ切^{ぶん}さ^ち、自^{おも}分^{つた}達^{かつ}の思^{おも}い^{つた}を伝^{かつ}え^{どう}る活^{かつ}動^{どう}をし^てい^ます。4年^{ねん}生^{せい}のこ^{さん}ろ^かから参^{まい}加^{とし}し、毎^が年^{がつ}8月^{いつ}5日^か・6日^{むい}に発^は表^{びやう}をし^てい^ます。

演^{えん}げ^きはと^むず^かか^お難^{おぼ}しいし、セ^{たい}リ^{へん}フも覚^{いち}え^{ばん}ないとい^{いち}け^{ばん}ないた^{いち}め、大^{たい}変^{へん}です。一^{いち}番^{ばん}なが^なとき^{とき}では、午^ご前^{ぜん}10時^じから午^ご後^ご9時^じまで練^{れん}習^{しゅう}した^{とき}時^{とき}もあ^あり^あります。けれど、

原^{げん}子^し爆^{ぼく}弾^{だん}のお^{へい}そ^ろし^さや平^{たい}和^{せつ}の大^し切^ひさ^たち^{つた}をまだあ^あま^あり^あり^あない人^{ひと}達^{たち}に伝^{つた}え^えたい

という^{おも}思いで^{れんしゅう}練習していると、^{ほんばん}つらくは^{きやく}ありません。本番、たくさんのお客
さんの^{まえ}前で、^{おも}せい^{ひょうげん}い^{そうぞう}っぱい^い思いを^{じょう}表現し、想像以上のはくしゅをもらえる
と、^{わたしたち}私^{おも}達の^{つた}思いが^{たっせい}伝わった^{かん}という、達成感があります。

^{わたし}私は^{せんそう}戦争を^{たいけん}体験していませんが、^{かつどう}こういう^{げん}活動^しを^{ばく}することで、^{だん}原子爆弾の
おそろしさを^{みらい}未来に^{つた}伝えていけるのではないかと^{おも}思います。ひばく^{しゃ}者^{かた}の方^が々
の^{くる}苦し^{かな}み、つらさ、きょう^ふ怖、いた^{かな}み、悲^{かな}しみ、い^{かな}かり、これらの^{おも}思いを^{ふか}深く
^{かんが}考え、^{ひょうげん}表現^すすることで、^{すこ}少しでも^きよりそえる^きような^き気が^するのです。

^{せんそう}戦争は、^{あいて}相手^{おも}を^{おも}思い^{ちい}やれ^おない、^{ちい}小さな^お「^おこう^おげ^おき」^おから^お起き^おる^おのではない^おか
と^{おも}思います。^{ひと}人^{ひと}々^{ひと}が^{もの}物^{とち}や^{ざい}土地^{ざい}、^{ざい}財^{ざい}産^{ざい}な^あど^おを^あう^おば^いい^あ合^いい、^お同^おじ^い命^{いのち}ある^{ひと}人^{ころ}を^{ころ}殺^{ころ}し
て^{ひと}い^{ひと}き^{ひと}ま^{ひと}す。^{ひと}人^{ひと}だ^{ひと}け^{ひと}で^{ひと}は^{ひと}あ^{ひと}り^{ひと}ま^{ひと}せ^{ひと}ん。^{ひと}動^{どう}物^{ぶつ}、^{ひと}魚^{さかな}、^{ひと}植^{しょく}物^{ぶつ}、^{ひと}い^{ひと}ろ^{ひと}い^{ひと}ろ^{ひと}な^{ひと}物^{もの}に^{えい}え^いい
き^いょう^いを^いあ^いた^いえ^いま^いす。^{ひと}一^{ひと}つ^{ひと}の^{ひと}「^{あいて}こう^{あいて}げ^{あいて}き」^{あいて}が、^{あいて}相^{あいて}手^{あいて}か^{あいて}ら^{あいて}の^{あいて}「^{あいて}こう^{あいて}げ^{あいて}き」^{あいて}を^{あいて}生^{あいて}み、
そ^{あいて}れ^{あいて}が^{あいて}ど^{あいて}ん^{あいて}ど^{あいて}ん^{あいて}あ^{あいて}が^{あいて}つ^{あいて}て^{あいて}い^{あいて}く^{あいて}の^{あいて}で^{あいて}す。^{あいて}そ^{あいて}れ^{あいて}で^{あいて}は、^{あいて}何^{なに}も^かあ^かわ^かり^かま^かせ^かん。

それ^{おと}な^{おと}の^{いま}にな^{いま}ぜ^{いま}大^{いま}人^{いま}た^{いま}ち^{いま}は、^{いま}今^{いま}も^{いま}「^{いま}こう^{いま}げ^{いま}き」^{いま}を^{いま}つ^{いま}づ^{いま}け^{いま}る^{いま}の^{いま}で^{いま}す^{いま}か。^{いま}過^か去^この^{いた}痛^{いた}
み^しを^し知^しつ^して^しい^しる^し今^{いま}の^{いま}世^{いま}界^せだ^せか^せら^せこ^せそ、^{いま}お^{いま}互^おい^おを^お思^おい^お合^おい、^お協^お力^おし^お合^おい、^お協^お力^おし^お合^おい、^お個^お性^お
を^お認^おめ^お合^おう^おこ^おと^おで^お戦^{せん}争^{そう}が^お起^おこ^おら^おな^おい^およ^おう^おに^おす^おる^おこ^おと^おが^お大^{たい}切^{せつ}な^{たい}の^{たい}で^{たい}し^{たい}
よ^{たい}う^{たい}か。^{たい}人^{じん}種^{しゅ}や^{せい}性^{べつ}別^さで^さ差^さ別^{べつ}を^{なん}し^{なん}て^{なん}も^{なん}何^{なん}の^{なん}得^{とく}に^{とく}も^{とく}な^{とく}り^{とく}ま^{とく}せ^{とく}ん。^{とく}こ^せの^せ世^せ界^{かい}で^{かい}は、^せだ^せ
れ^せも^せが^せ唯^{ゆい}一^{いつ}無^む二^にの^{そん}存^{ざい}で^{そん}す。^{そん}人^{ひと}そ^{ひと}れ^{ひと}ぞ^{ひと}れ^{ひと}の^{ひと}個^こ性^{せい}を^み認^みめ^あ合^あい、^あ世^せ界^{かい}中^{じゅう}が^は花^{はな}の^{はな}よ
う^えな^え笑^え顔^がであ^えふ^えれる、^えそ^えん^えな^え世^せ界^{かい}を、^え私^{わたし}達^{たち}が^み未^み来^{らい}へ^みつ^みな^みい^みで^みい^みき^みま^みし^みよ^みう。

「^{つぎ}さ^{つぎ}あ^{つぎ}次^{つぎ}は、^{わたし}私^{たち}達^{ぼん}の^{ぼん}番^{ぼん}で^{ぼん}す！」



ともに

ひろしま しりつ ま がめしょうがっこう
広島市立真亀小学校

たかはし るい
高橋 瑠偉

ひと たいせつ
人を大切にする チャレンジする

ま がめしょうがっこう あいことば
これは、真亀小学校みんなの合言葉です。

ぼくたちの学校は、1年生から6年生まで、全て1クラスの学校です。この6年生も6年間、一つのクラス、同じ仲間と過ごしてきました。ぼくたちのクラスは、活動するときには協力し、困ったときには支え合い、楽しいときにはみんなで笑い合う、本当に仲の良いクラスです。気持ちをつなげて、仲間と仲間とつながり、今日の自分を明日へとつないでいこうと、日々、みんなで過ごしています。この6年生、1クラス28人という、小さな、小さな社会には、小さな平和があると思っています。ぼくは、この身近な平和を大切にしていきたいです。

ぼくが、平和のことを考え始めたのは、4年生で平和記念公園に行った時からでした。そこでアオギリの傷を見た時、その瞬間がどんなにすごかったのか物語っているような気がしました。そして、たくさんの千羽づるが作られ、祈りがささげられていることを知り、少しずつ平和ということ意識し始めたように思います。

5年生の時には、真亀にお住まいの被爆体験伝承者の水野さんからお話を聞くことができました。

「家族が被爆して、亡くなった代わりにくん章をいただいた。けれど、どん

なくん^{しょう}章をもらっても、大切な人^{たいせつ ひと}とは変えられない。」

と、話^{はな}されたことが印象的^{いんしょうてき}でした。被爆者^{ひばくしゃ}がどんないたみ^うを受けて生きてい
るのか、どんな思い^{おも}をして生きてい^いるのか、ヒロシマの思い^{おも}を、つないでくれ
ているのだとわ^わかりました。ぼくは、話^{はなし}を聞^きいているうちに、苦しい思い^{くる おも}で
いっぱいになりました。この時^{とき}、初^{はじ}めて、たくさんの命^{いのち}や、平和な生活^{へいわ せいかつ}がう
ばわれる恐^{おそ}ろしさを知^しったような気^きがします。

みずの^{みずの} 水野^{みずの}さんは最後^{さいご}に、

「平和^{へいわ}とは何か^{なに}、考^{かんが}えてみてください。」

と、投^なげかけられました。しかし、ぼくはすぐには答^{こた}えを思^{おも}いつくことはでき
ませんでした。

6年生^{ねんせい}になった今^{いま}、自分^{じぶん}の生活^{せいかつ}やこれまで学^{がく}習^{しゅう}したことをふり返^{かえ}ることを
とおして、自分^{じぶん}の身^み近^{ぢか}に、つな^あがり合^いって生ま^{へいわ}れる平和^{へいわ}があることに気^きづきまし
た。この6月^{がつ}からも、今^{いま}ある小^{ちい}さな平和^{へいわ}をつな^{ひろ}いで、広^{ひろ}げられるように、クラ
スみんな^{はな}で話^あし合^{こと}い「プラス言^{こと}葉^ばを多^{おお}くして、積^{せつき}極^{よく}的に発^{はつ}言^{げん}し合^あうこと」に、
とく^{とく}組^{はじ}み始^まめました。真^ま亀^{がめ}小^{しょう}学^{がっこう}6年生^{ねんせい}で感^{かん}じる、小^{ちい}さな平和^{へいわ}を大^{たい}切^{せつ}にして、
クラ^{がっこう}スから学^{ぜん}校^{たい}全体^{ちい}に、小^{ちい}さな平和^{へいわ}から大^{おお}きな平和^{へいわ}に広^{ひろ}げられるよう、まず^は
過^すごしていきま^すす。

人^{ひと}と人^{ひと}とがつな^あがり合^すい、おだやかに過^{きょう}ごしていくこと。今日^{けい}の平和^{へいわ}を明日^{あした}
につな^{ちい}いでいくこと。この小^{ちい}さな平和^{へいわ}をつな^{ひろ}ぎ、広^{ひろ}げていくこと。つなぐ、つ
なげる、つな^{ひと}がる、人^{ひと}を大^{たい}切^{せつ}にする、チャ^{ちや}レ^{れん}ジする、と^わもに分^わかり合^あえる、
仲^{なか}間^まの輪^わを広^{ひろ}げられるよう、ぼくはチャ^{ちや}レ^{れん}ジしていきま^すす。



はもん ひろ へいわ
波紋のように、広がれ！平和

ひろしま しりつなかのしょうがっこう たむら けんたろう
広島市立中野小学校 谷村 健太郎

「ドカーーン！！」

1945年8月6日、8時15分。けたたましい衝撃音が空に響き渡り、
地上は一瞬で地獄になりました。建物は崩れて燃え、たくさんの人が亡くな
り、生き残った被爆者達は今も癒えぬ心の傷に苦しんでいます。

そんなことが僕の身に起こったらと考えるだけで耐えきれません。僕は
今、「平和」であり、幸せだからです。僕にとっての平和とは、「日常生活が
送れること」であると考えています。友達と笑い合い、おいしいご飯を食べ
て、ぐっすり安心して寝る。当たり前のことだと思っていました。つい最近ま
では・・・。

しかし、テレビを見て、そうではないことに気づきました。僕が平和につい
て考え、文章を書いている今でも、戦争は起きています。前の日までは日常
生活を送っていた人達も、国と国との争いに巻き込まれ、大事な誰かを失っ
ています。約80年前の悲劇を、どうして学習せず、また繰り返すのだらう
ともどかしい気持ちになりました。平和な世の中になるためにはどうしたら
よいのだらうかと父に聞きました。

「平和とは『バランスがとれている状態』のことを言うのだと思うよ。
お前たちも、ホールケーキを切り分けたとき、大きさが違えば喧嘩になるだろ
う。」僕はその意見にとっても共感しました。同時にある疑問も浮かびました。
なぜ国同士は、もっとシンプルに、バランスを調整し合えないのだらうか、

と。人種や話す言葉が違えば、歴史も価値観も違い、与え合うのは難しいのは分かります。そう簡単にはいかないのは分かっています。ただでそれだけで逃げ、諦めて先延ばしにしている、溝は深まるばかりだと思っただけです。「争い」は虫歯に似ているなどと思います。一度なってしまうと、酷くなることはあっても治ることはない。その事実を皆が理解し、もっと平和について平等に教育がなされる必要があると思います。

そのために「世界共通」の平和についての教科書などがあればよいのではないかと思います。戦争の当事者の証言や、被害等、多国籍の専門家の人達に関わり、事実だけを記したものを作れば、受け入れてもらえると思います。知ったらきっと、誰も過去の悲劇を再び起こすことは考えなくなると思います。自分事ととらえることができたなら、きっと互いを思いやる心が波紋のように広がるはずです。世界中が助け合えるようになると思います。

一人一人の力は微力かもしれませんが、絡まっている「問題」という糸を一人一人の意識と行動でほどいていき、いつか「平和」というあたたかいマフラーを完成させることが出来たらなんて素晴らしい事だろうと思います。

僕は、世界で初めて原子爆弾が落とされた町、広島に生まれた者として、平和がどれだけ尊いものか、学び、伝えていきたいと思っています。姉が、被爆者の方の声を自分の耳で聞く活動を行っているので、自分も見習いたいです。

そして、中学校に入学したら、争いによって故郷を去ることを余儀なくされた方への支援物資購入のため、募金活動をしていきたいと考えています。

自分にできることを考え、平和のために行動していきます。



だれもが^{しあわ}幸^{おも}せと思^ひえる日^めを目指^ぎして

ひろしましりついつかいちかんのんしょうがっこう ^{さとう} 佐藤 ^{みゆ} 心優

「あなたの^{くに}国は、今^{いま}幸^{あわ}せですか。」

この問^といかけに世^せ界^{かい}中^{じゅう}の何^{なん}人^{にん}の人^{ひと}々が「はい」と答^{こた}えられるでしょう

1945年、8月6日、午^ん前^{がつ}8時15分、原^ご子^{ぜん}爆^じ弾^{ふん}が広^{げん}島^{しぼく}に投^{ひろ}下^{しま}されました。

街^{まち}は炎^{ほのお}に包^{つつ}まれ、放^{ほう}射^{しゃ}線^{せん}をあびた^{ひと}人^{ねっ}、熱^{ねっ}線^{せん}や爆^{ぼく}風^{ふう}で亡^なくな^{ひと}った人^かたちが、数^{かず}

え切^きれないほ^{かあ}どい^{かあ}ます。「お母^{かあ}ちゃん、ど^{かあ}こに^{かあ}いるの。お母^{かあ}ちゃん、お母^{かあ}ちゃ

ん。」と家^か族^{ぞく}をさ^{こえ}が^{くろ}す声^{こゑ}。黒^{くろ}こ^ちげ^{なが}にな^{ひと}り、血^ちを流^{なが}す人^{ひと}々^{みず}。「水^{みず}をくれ。」と水^{みず}を

求^{もと}める人^{ひと}々^{ひと}。「なん^{わたし}で私^いだけ生^いきてい^かるの。」と家^か族^{ぞく}が亡^なくなり、生^いきてい^い

意^い味^みが分^わから^{ひと}なくな^{ひと}る人^{ひと}もい^います。

核^{かく}兵^{へい}器^きや戦^{せん}争^{そう}は、い^{たい}ろ^{せつ}い^{ひと}ろ^じろ^ぶんな^たもの^{から}を^{もの}を^のう^ばい^いま^す。大^{たい}切^{せつ}な^{ひと}人^{ひと}、自^じ分^ぶん^たの^たら^らの^{もの}宝^た物^{もの}、

当^あた^{まえ}り^に前^ちの^じ日^じ常^{じょう}ま^でを^も、う^とば^い取^とり^ます。そ^{くろ}の^{くろ}苦^くし^み、絶^{ぜつ}望^{ぼう}、悲^{かな}し^みの^{げん}因^{いん}

は同^{おな}じ^{ひと}「人^{ひと}」な^たの^たです。戦^{たた}い、争^あい、殺^{ころ}し^あ合^あい、に^{おな}く^{にん}し^{げん}み^ん合^んう。同^{おな}じ^{にん}間^{げん}な

の^に、争^あい^あ合^あう^のの^のです。そ^{せい}れ^ぎは「正^{せい}義^ぎ」な^のの^ので^しょう^か。傷^{きず}付^つけ^あ合^あう^のが^{せい}正^{せい}

義^ぎで^しょう^か。殺^{ころ}さ^{ころ}れ^たら^たら^たら^た殺^{ころ}し^ても^よい^のの^ので^しょう^か。そ^{こう}の^{どう}行^た動^だは、「正^{せい}し^い」の^ので^し

か。

人^{ひと}は、優^{やさ}しい^ここ^ろ心^こ、勇^{ゆう}気^きの^こある^ここ^ろ心^こ、助^{たす}け^あ合^こう^こ心^こ、そ^こんな^ここ^ろ心^こを^もっ^てい^ます。

け^れど、本^{ほん}当^{とう}に^こう^{どう}そ^うの^こ行^{こう}動^{どう}を^して^よい^のか、行^{こう}動^{どう}す^る前^{まえ}に^いち^どか^んが考^{かん}え^るべ^き

だ^おと^も思^{おも}い^ます。

私^{わたし}の^{そう}曾^そ祖^ぼ母^ぼは、原^{げん}子^し爆^し弾^{ぼく}が^{とう}投^た下^かさ^れた^よく^日、え^{じつ}ん^ごの^{ひろ}た^まえ^むの^ため^に広^{ひろ}島^{しま}へ^む向^む

い^まし^た。そ^{ほう}し^て、そ^{ほう}こ^で放^{ほう}射^{しゃ}線^{せん}を^あび^てし^まっ^たの^ので^す。曾^{そう}祖^そ母^ぼは、優^{やさ}しい

こ^ころ^もの^ぬし^は主^{しゅ}です。で^すが、そ^{やさ}の^こ優^こしい^ここ^ろ心^こを^うば^って^しま^って^いた^ら…。他^{ほか}に

も^{やさ}優^こしい^ここ^ろ心^こを^うば^われ^てい^る人^{ひと}が^いた^ら…。そ^{こと}れ^ばは^で言^き言^ばに^で出^で来^きない^ほど、ゆ

るせない事ことです。広島ひろしまの空そらで放たれた一つの爆弾はなが、当たり前ひとの日常ばくだんや、家あ族まえ、心にちじょう、他かにもたくさんなのものいうばっていき、被爆者ひばくしゃやその家族かぞくの心こころに深いふか傷きずを残しのこ、今いまもなおく、苦しんでひといる人がいます。そして、その傷きずは治なおること、治なおすことも絶対ぜったいにできません。それは、あの日の出来事ひが、昨日ひのできごとのきのようのうに被害者ひがいしゃの方かたの心こころに鮮明せんめいに刻きざまれているからです。

今いまの世よの中なかは「平和へいわ」だひとという人おもが、きついまといると思いまいます。けれど、今いま、戦争せんそうをしている人ひとの立場たちばから見たらみどうでしょうか。家いえがこわされ、おびえて暮くらしている。これを平和へいわと言いえるのでしょうか。私わたしはそうは思おもえません。

しかし、本当ほんとうに平和へいわと思おもえる日は、そう遠ひくないと思とおいます。一人一人おもが平和ひとりひとりを願へいわい、正ただしい行こうどう動うをしていたら、世界せかいの人ひとが心こころから「幸しあわせ」「平へいわ和い」と言いえる時ときが来るくのではないでいましょうか。今いま、この時代じだいに生まうれてきた私わたしたちは恵めぐまれています。そして、私わたしたちには使しめい命ひがあります。あの日の出来事ひや、被爆者ひばくしゃの方かた々の思おもいを受うけついでいくことたいけんです。しかし、被爆者ひばくしゃの方かた々の体たい験けんや思おもいを100パーセント分わかりきることことはできわません。けれど、それを分わかろうとして、私わたしたちが精せい一杯いっぱい、大人おとなになっこうせいたときつたに後世こうせいに伝つたえていけば、未来みらいは変かわるのかもしれません。

後世こうせいに伝つたえることいまはすぐにはできわたしません。だから、今いまの私わたしにできることいは悪口わるぐちを言いわないこと、悪口わるぐちを言いわないようふんな雰い囲き気きづくりを大切たいせつにすることです。これらあいてをするわたしことで、相手あいても私わたしも悲かなしい思おもいをするたのことなく、楽たのしく生活せいすることができせいます。楽たのしく生活せいすることは「幸しあわせ」への第だい一いっ歩ぽだと思おもいます。その「幸しあわせ」が広ひろがると「平へいわ和い」な世よの中なかになるなのではないでいしょうか。

私わたしは祈いのります。平和へいわな未来みらいになるほしことを。そして、この星ほしのだれもが、心こころから「幸しあわせ」と思おもえる日ひが来るくことを。



へい わ あ まえ 平和を当たり前

ひろしま しりつつ かいちひがししょうがっこう よねひろ ともる
広島市立五日市東 小学校 米廣 朋留

ぼく わら はん た ふつう せいかつ あ まえ おも
僕は、笑って、ご飯を食べて、普通に生活することは当たり前だと思ってい
ました。しかし1945年、8月6日。その当り前は、たった一発の原子爆
弾によって広島から消えてしまいました。裸足のまま、炎から逃げる人々。
死体だらけの川。

みず みず
「水をくれえ。水をくれえ。」

たす もと ひと にんげん い あ まえ
と、助けを求める人。このとき、人間として生きることさえ、当たり前ではな
くなってしまったのです。そんなことが起きた広島で、僕が、今、普通に生活
することが当たり前に思えているのは、広島の復興を手がけた方々や、被爆者
の方々の思いのおかげだと考えています。

いま ほんとう ふつう せいかつ あ まえ
しかし、今は、本当に普通に生活することが当たり前だといえるのでしょ
うか。自分中心ではなく世界全体に目を向けて、普通の生活をだれもおびや
かされないことが、当たり前にならないといけないと思います。

ねんご ねんご いま せかい せんそう ふんそう お
また、10年後、20年後はどうでしょう。今、世界では戦争や紛争が起こ
っています。ニュースや新聞を見ると、日本も戦争をしかねない状況にある
と感じてしまいます。それは、自分が戦争をすることになると、自分事として
考えないといけないということです。

せんじつ へい わ がくしゅう がっこう き ひばくしゃ かじや せんせい はなし
先日、平和学習のために学校に来てくださった、被爆者の梶矢先生のお話
によると、広島に落とされた原子爆弾のおよそ2,000倍もの威力がある
爆弾がつくられているそうです。その爆弾が日本に使われると、たった一発で

にほん ぜんめつ にほん ちきゅうぜんたい えいきょう
日本は全滅してしまいます。日本だけではありません。地球全体にも影響が
およ ばなし き おおぜい ひとびと な
及ぶかもしれません。その話を聞き、「また、大勢の人々が亡くなってしまう
のだろうか。」そう考えれば考えるほど怖くなります。

かじや せんせい はなし き ぼく きづ ふつう せいかつ
梶矢先生のお話を聞きながら、僕は気付きました。普通に生活することこ
そが、へいわ のだと。これからの未来は、へいわ あ まえ たいせつ
そが、平和なのだと。これからの未来は、平和を「当たり前」にすることが大切
なのではないでしょうか。せんそう せんそう よ なか ふつう せいかつ
戦争をするかもしれない世の中では、普通の生活が
まも かくへいき つか せんそう せんそう くに
守られません。ましてや、核兵器を使って戦争をすれば、戦争をしている国だ
けでなく、せかいぜんたい じんるい き き
世界全体、つまり人類が危機におちいってしまいます。

もちろん、そんなことになってはいけません。ぼく
僕たちにもできることはあり
ます。まず、ぼく せだい つぎ せだい げんしばくだん おそ つた へいわ ねが
僕たちの世代が次の世代に原子爆弾の恐ろしさを伝え、平和を願
う輪を広げていくことです。あと10年もすれば、ひばくしゃ かた
被爆者の方はいなくなっ
てしまいます。そうすると、つぎ せだい ぼく おな
次の世代につなげていくのは僕たちです。また同じ
くる く かえ ひばくしゃ かた くる の こ つた つづ
苦しみが繰り返されることは、被爆者の方が苦しさを乗り越え伝え続けてく
ださったことをむだにしています。

もう一つは、ひと ひと ちから ささ あ つか ひと そうぞうりよく
人の力を支え合いに使うことです。人は想像力をもっていま
す。ひと いた そうぞう みらい そうぞう へいわ だれ のぞ
人の痛みを想像したり、未来を想像したりして、平和は誰もが望んでいる
ことだと、しっかりと意識することが大切です。ささ あ ちから あらそ たいりつ
支え合う力は、争いや対立
の こ ちから おも ひとり かな
を乗り越える力があると思います。一人では叶えられないことも、たくさん
ひと ささ あ かなら かな
の人が支え合えば必ず、叶えられます。

みらい む けつ へいわ あ まえ い ひ
未来に向けて決してあきらめなければ、「平和は当たり前です。」と言える日
が来るはずです。



つた 伝えたい

ひろしま しりつあや おかしやうがっこう つぎき あおい
広島市立彩が丘小学校 津崎 藍衣

ねんまえ がつむいか わたし そふ よこがわちやう たいない ひばく う
78年前の8月6日、私の祖父が横川町で胎内被爆を受けました。そう
そぼ にしはくしまちやう じたく よこがわほうめん うばぐるま か もの で
祖母が、西白島町の自宅から横川方面へ乳母車をおしながら買い物に出か
けていたと中、強い光を浴びて、乳母車をかばいながらうずくまりました。
ちゆう つよ ひかり あ うばぐるま
きせきの的に周りの建物に守られていたので、ケガもやけどもなく助かりまし
た。その23日後に祖父は生まれたのです。
てき まわ たてもん まも たす

そふ わたし
祖父は私に、

ちよくせつげんばく たいけん わ
「直接原爆を体験していないから分からない。」

い とうじ き おもだ わたし すこ おし
と言いながらも、当時の記おくを思い出しながら、私に少しずつ教えてくれ
ました。

そふ ものごころ とき いえ なに と あと
祖父が物心がついた時には、家も何もかもふき飛んでいた後だったので
ても貧しく、食べる物もなかったのも、太田川でアサリをとったり、草やイナ
ゴも食べたりしていたようです。しょうがっこうていがくねん はいきゆうはいたつ じよしゆ
のアルバイトをしながら母を支えていました。
はは ささ

しょうがく ねんせい げんばく がいちやう さ いんかい けんきゆうじよ
小学4年生になったころ、ABCC原爆しょう害調査委員会の研究所に
よばれ、けんさ う なか しょうとう だん くだ
呼ばれ、検査を受けたそうです。中には、小頭しょうというしん断を下され
た子どもも多くいたと聞きました。その時の話をする祖父の顔は、いらだち
かな くら いんしやう なん もくてき よ し
と悲しみで暗い印象でした。そこに何の目的で呼ばれたのかも知らされな
ったきやうふ感と、自分も小頭しょうとしん断されるかもしれないという不
かん じぶん しょうとう だん ふ

あんかん、そして、胎内被爆への差別の苦しみを思うと、私も心が苦しくなって、言葉が出ませんでした。今、平和にいらしている広島で、78年前にこんな事が起きたなんて正直信じられません。原爆ドームの周りには、たくさんの建物や自然があふれています。でも、ここで起きた78年前の出来事は物語ではなく、事実なんだという事を祖父から聞いて強く感じました。

その後、そう祖母は、83歳で亡くなるまで、大きな病気もせず、元気にくらししました。祖父も元気で、私達孫といつも遊んでくれています。

今、世界では色々な国で戦争が起きています。ウクライナでは、私と同じような年れいの子供が戦争で苦しんでいる映像をテレビでたくさん見ます。こんな悲しい映像はもう見たくない。2023年5月19日から開かれたG7広島サミットでは、各国の首脳達が平和の大切さについて発信していました。メディアや多数の意見では、賛成の声が多かったですが、私は、少しぎ間に感じるのです。核廃絶に向けて、具体的な話がされなかったので、被爆者の思いは本当に伝わっているのでしょうか。

祖父の被爆体験を聞いて、原爆を直接体験した人がどんどん少なくなってきている事を実感しました。原爆の悲さんさやこわさが、まるで物語のようになっていき、だんだんわすれさられていく未来が絶対に来てはいけません。

なので、広島で生まれ育った人達が、未来へ伝えていかなければなりません。私も、平和の大切さを、世界へ発信できるような大人になりたいと強く思います。



戦争の意味

ひろしま しりつしうちきたしょうがっこう たけした けん た
広島市立石内北小学校 竹下 健太

1945年8月6日午前8時15分。一発の原子爆弾が、目に突きさす光、
耳をさくような爆音、肌が焼けるような熱を放ちました。一瞬で広島
の街を焼け野原にしました。そして、人々の大切なもの、「家族」をうばいました。
ぼくのひいおじいちゃんも被爆して、そのおそろしさを聞き、なぜ戦争が
起こるのか、考えました。

すると、「戦争の対義語は平和」であると以前習ったことを思い出しました。
対義語とは反対を意味しています。そしてもう一つ、「同じ意味」や「似た意味」
を表す類義語があります。でも戦争の類義語は習っていません。「戦争の類義
語は何だろう。」と考えると、たどりついた答えは「けんか」でした。けんかは戦争
と同じように人と人が争い、お互いを傷つけます。

けんかと戦争、ちがうところはほとんどありません。スケールが大きいか小
さいかのちがいで、いろいろなところで起きた小さなけんかが大きな
戦争を呼び起こしているのです。

人は、一人では生きていくことができません。一人一人がそれぞれの個性を
もっていて、得意なことや好きなことがあります。そしてもちろん苦手なこと
も人それぞれです。

その人の苦手なことをほかの人の得意なことで補うことが本当の「人」、

つまり人と人の支え合いで人は生きているということだと思ひます。

人と人がつながることで、初めて「人」として生きていけるのです。お互いが、相手は、自分とちがう体、心をもっていると考えると、争うこともなくなるのではないのでしょうか。

5年生の国語科でやなせたかさんの「アンパンマンの勇氣」を学習しました。その中に次のような言葉があります。「戦争は結局、殺し合いだ。」

人は、何かをされた、傷つけられた、などのいろいろな理由を背負って、正義と名乗り、相手を傷つけます。もっと、他の方法はないのでしょうか。仲間、自分を守るためには、戦うことしかできないのでしょうか。ぼくはちがうと思ひます。戦えば、体と心のどちらか、もしくは両方が傷つきます。それは相手も同じです。このことをどちらも分かっていたら、人間が進化の過程で手に入れた「言葉」を使って冷静に話し合っ、物事を解決できます。人はしっかりと自分の口から意見を言い、相手の意見を自分の耳からしっかりと取り入れ、心で受け止めます。そうすれば戦争は無くなると、ぼくは思ひます。戦争が無くなった世界では、武器も核兵器も必要ありません。人と人が支え合い、お互いの意見やそのちがいを認め合うことで、戦争をする意味が無くなります。また、戦争や核兵器などがこの世の中から無くなれば、ぼくのように「戦争」という言葉の意味を考へる人もいなくなるでしょう。それが「平和」だと思ひます。



へいわ おも 平和にかける思い

ひろしま しりつ のぼりちょうしょうがっこう もりと もりとも まさなり
広島市立 幟町 小学校 森友 優成

ぼくは、5年生の時、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に行きました。そ

こで、被爆から数か月で9万から16万人の方が命を落としたこと、この数

は当時の、広島市の人口2分の1以上だということ、その中には9才以下の

子どもも7万人以上含まれていたことが分かりました。戦争で、家もなくし、

ご飯も食べられず、家族を失った人たちがいたことを考えると、とても悲し

い気持ちになりました。今、ぼくたちの当たり前前の生活は、戦時中の人々に

とっては、当たり前ではないのだと気付きました。

家に帰り、父に目の当たりにしたことを話すと、衝撃の事実を知りました。

僕のそう祖父は、昨年亡くなりました。山口の田舎に住んでいた優しい優しい

そう祖父でした。そう祖父は、戦時中、軍隊に入っており、二葉山で被爆し

たそうです。

そして、父が国立広島原爆死没者追悼平和祈念館のホームページに載って

いるそう祖父の体験記を読んでもくれました。顔や手におおやけどを負ってた

くさんの人が亡くなったこと。原爆から逃げのびた人も放射能の影響で多く

の人が亡くなってしまったこと。大切な人を助けようとして助けられなかつ

かな せ お たいけん き ぼく いちばんいんしょう のこ
た 悲 しみ を 背 負 っ た こ と 。 体 験 記 の 中 で 、 僕 が 一 番 印 象 に 残 っ て い る の は 、
かあ な さい おんな こ たす たす
お 母 さ ん を 亡 く し た 2 歳 ぐ ら い の 女 の 子 を 助 け よ う と し て 助 け ら れ な か っ
た と い う こ と で す 。

こ かあ こ だ な かあ
そ の 子 の お 母 さ ん は そ の 子 を 抱 き し め た ま ま 亡 く な っ て い ま し た 。 「 お 母 ち
や ん 」 と 泣 き 叫 ぶ そ の 子 を 、 そ う 祖 父 の 戦 友 が 連 れ て 帰 っ て き て 、 み ん な で ご
はん みず
飯 を あ げ た り 水 を あ げ た り し て い ま し た が 、 あ ま り ひ ど い や け ど も な か っ た
の に 、 よ く じ つ な
翌 日 に は 亡 く な っ て い た そ う で す 。 そ う 祖 父 は 、 一 生 そ の 子 の 姿 が 忘
れ ら れ な か っ た そ う で す 。

え が お そ ふ じ ご く たいけん
い つ も 笑 顔 だ っ た そ う 祖 父 が 、 こ ん な 地 獄 の よ う な 体 験 を し て い た な ん て
おも
思 っ て も み ま せ ん で し た 。 ぼ く は 、 そ う 祖 父 の 「 世 界 中 の 人 々 に 核 兵 器 の 悲
さん つた せ かい かくへいき
惨 さ を 伝 え 、 こ の 世 界 か ら 核 兵 器 を な く し た い 。 」 と い う 平 和 へ の 思 い を 知 り
ま し た 。

ことし へいわ いいんかい いいんちょう せんそう あらそ
ぼ く は 今 年 、 平 和 委 員 会 に 入 り 、 委 員 長 に な り ま し た 。 戦 争 や 争 い を な く
す た め に は 、 あ い て た ち ば かんが たいせつ おも ひ び
相 手 の 立 場 に た っ て 考 え る こ と が 大 切 だ と 思 い ま す 。 日 々 の
せいかつ なか あいて き も いた そうぞう こうどう どりよく
生 活 の 中 で 、 相 手 の 気 持 ち や 痛 み を 想 像 し て か ら 行 動 で き る よ う に 努 力 し て
い ま す 。 ちい いっぽ と も きょうりよく ひとりひとり やさ
小 さ な 一 歩 か も し れ ま せ ん が 、 友 だ ち と 協 力 し 、 一 人 一 人 が 優 し い
きも へいわ まいにち きず
気 持 ち を も っ て 平 和 な 毎 日 を 築 い て い く こ と が 、 そ う 祖 父 の 平 和 へ の 思 い を
ひ つ へいわ みらい しん
引 き 継 ぎ 平 和 な 未 来 を つ く っ て い く こ と に な る と 信 じ て い ま す 。



「いつも通り」が続くために

ひろしま しりつふくろまちしょうがっこう かわせ はるみ
広島市立袋町小学校 川瀬 春美

「もし、軍需工場がなかったら、は一ちゃんは生まれてなかったかもね。」

洗濯物をたたみながら、母がつぶやいた。私は、その言葉に驚いた。戦争があった方が良くという意味なのかと思ったからだ。しかし、もちろんそうではなかった。

私の曾祖父は、呉の軍需工場で曾祖母と出会い、結婚した。そして、祖父が生まれ、母が生まれた。戦争中も、普通に恋愛し、普通に生活していたのだ。

母は、小学生の頃、曾祖母から原爆の話聞いたそう。曾祖母は、「8月6日の朝、広島市内に行こうと、呉駅で待ってたら、市内の方角にきのこ雲が見えた。その日、電車は来なかった。広島で大変なことが起こったと思ったんよ。でもね、その後の事は忘れたわ。」と語っていたそう。

「今思うと、忘れたんじゃない、話したくなかったんよ。」

と、母は言った。私も「ひいばあちゃんがきのこ雲を見たのは知っていたけど、話を聞いたことは、一度もない。」と思った。すると、それまでのことが全てつながった。ひいばあちゃんは、忘れようとしていたのだ。語りたくなかったのだ。

あの日、広島で「いつも通り」の生活を送っていた人々は、一発の爆弾で、全てを奪われた。戦後78年が経っても、その傷は消えていない。忘れたくて

も、忘れられない。だから、話さない。心の奥に戦争の傷をしまい込み、何もなかったかのように「いつも通り」に振る舞っているのだ。でも、「いつも通り」って何だろう。「いつも通り」とは、私で言えば、毎日、家族と笑い合えること、毎日、友達と楽しく学校生活を送れることではないだろうか。

78年前のあの日、8月6日の午前8時15分、多くの人々が、一瞬にして、「いつも通り」をうばわれたのだ。家族や友達との「いつも通り」を。

あの日から78年が経った今、この瞬間にも、地球上では実際に戦争が起こり、毎日のように人々から「いつも通り」が奪われている。人々の「いつも通り」の日常が、ありふれた毎日が、「いつも通り」に続いていくために、私にできることはあるのでしょうか。

私は、8月6日を知りません。でも、広島に暮らす一人として、「ヒロシマの歴史」を知り、「ヒロシマの記憶」を、「ヒロシマの人々の思い」を受け継ぐことはできます。

先日も、学校で平和学習講座が行われ、私たちが、被爆者の方々から直接お話を聞ける最後の世代であることを知りました。伝承者の方からも、「教わる側」から「伝える側」へと立場を変えることの重要性を教えてくださいました。

私はこれからも、平和について考え続け、「ヒロシマの歴史」を、そして、「平和の尊さ」を世界へ伝えていく使命を果たしていきます。人々の「いつも通り」が続く世界のために。



ちい きおく おお かな
小さな記憶 大きな悲しみ

ひろしま しりつよしじましようがっこう かわむら ま き
広島市立吉島小学校 河村 真希

みなさんは、小さい頃の^{ちい ころ}ことを覚えていますか。私はこの前^{わたし まえ}、昔^{むかし}の^{しゃしん}写真を整理^{せいり}していると、3歳^{さい}の時の七五三姿^{しちごさんすがた}の自分^{じぶん}が笑^{わら}っている写真^{しゃしん}がありました。お母^{かあ}さんが、

「この写真^{しゃしん}くらいしか、笑^{わら}っているのはないんよ。」

と言^いっていました。私^{わたし}は小さい頃^{ちい ころ}、写真^{しゃしん}を撮^とると言^いわれると、すぐ変^{へん}な顔^{かお}をしていたそうです。ですが、全^{まった}く覚^{おぼ}えていません。泣^ないたり笑^{わら}ったりした記^き憶^{おく}も、時^{とき}が経^たつにつれて消^きえてしまうのです。

それは仕方^{しかた}がないことですが、消^けしたくても消^きえない記憶^{きおく}もあるのではないのでしょうか。

「ピカッ。」

今^{ねんまえ}から78年前^{いっばつ げん}の夏^{しばくだん}、たった一発^{くろ}の原子爆弾^{かな}が、たくさん^{くる}の苦しみ^{かな}と悲しみ^{かな}を人間^{にんげん}に与^{あた}えました。この一発^{いっばつ}で約56万人^{まんにん}もの人々^{ひとびと}が被爆^{ひばく}し、その年^{とし}の末^{すえ}までに約14万人^{やく まんにん}が亡^なくなったと言^いわれています。爆心^{ばくしん}地^ち周^{ちゅう}辺^{へん}の温^{おん}度^どは、3000度^ど～4000度^どまでに達^{たっ}し、人々^{ひとびと}は、皮^ひ膚^ふが焼^やかれたり、家屋^{かおく}に推^おしつぶされたりし、亡^なくなる人^{ひと}も出^でてきました。また、世界^{せかい}で初^{はじ}めて広島^{ひろしま}に投^{とう}下^かされた原子爆弾^{げんしばくだん}という核兵器^{かくへいき}は、放射線^{ほうしゃせん}を大量^{たいりょう}に放^{ほう}出^{しゅつ}するため、無傷^{むきず}と思^{おも}われた人^{ひと}でも月日^{つきひ}が経^{けい}過^かして発^{はつ}病^{びょう}することもあり、とて^{きけん}も危^き険^{けん}なものでした。

原子爆弾^{げんしばくだん}が投^{とう}下^かされた時^{とき}、私^{わたし}の祖^そ父^ふは爆心^{ばくしん}地^ちから遠^{とお}く離^{はな}れた安芸郡坂町^{あきぐんさかちょう}に住^すんでいて、当^{とう}時^じ5歳^{さい}でした。

「ドーン。」

とても大きな音が聞こえてきて、たくさんのケガをした人たちが逃げてきた
そうです。幼かった祖父は、その人たちの深い傷口にわたしたウジムシを一つ
ずつ取る様子を見ていたと言っていました。何も食わずに死んでいく人も
何人もいたそうです。人々が死んでいく姿を目の当たりにし、とても怖く悲
しかったと思います。

戦争は、大人だけではなく、小さな子どもまで巻き込み、その人たちの記憶
を悲しみで埋め尽くしてしまうものだと思います。

では、私たちが子どもの手で戦争を止めることはできないのでしょうか。私
たち子どもは、何もできないのでしょうか。

私たちは知ることができます。戦争の恐ろしさや愚かさを。

私たちは考えることができます。戦争を体験した人々が、どんなに悲しい
思いをしたか。ここまでたくさんの人々を悲しませる戦争は、決して起きては
いけないということ。

私たちは伝えることができます。平和がどれほど大切かということ。

私たちが子どもも、被爆者の代わりとなり、その思いを伝えることで、未来を
明るいものに変えられるのではないのでしょうか。

私は伝えます。原爆の恐ろしさや被爆者の願いを。未来に向かって。今の
政治や社会、戦争または平和をどう考え、どうしていくのかについて、私た
ち子どもも話し合いを重ね、よりよい考えや意見を出していきたいです。

戦争で悲しむ人が出ない平和な社会に向けて、みなさんも考えてみません
か。



せ かいへい わ あ まえ
世界平和を当たり前

ひろしま しりつとうじょうしょうがっこう おかむら そうすけ
広島市立東浄小学校 岡村 颯祐

ねんまえ がつむいか あさ いま おな えがお よ
78年前の8月6日の朝には、今と同じくたくさんの笑顔がありました。世
なか せんそう にちじょう えがお
の中は戦争をしていたけれど、それでも日常はあり、きっとたくさんの笑顔
ひろしま いっぱつ げんしばくだん えがお なんまんにん
が広島にもあったはずです。でも、一発の原子爆弾が、その笑顔も、何万人と
たいせつ ひと いのち いっしゅん いっぱつ げん しばくだん
いう大切な人と命も、一瞬にしてうばってしまったのです。一発の原子爆弾
ひろしま まち ぜつぼう
によって広島町は絶望でいっぱいになったのです。

ねんせい むすめ いわ
ぼくは、5年生のときに、「いわたくんのおばあちゃん」の娘さんである岩
た み ほ げん しばくだん はなし き
田美穂さんから、原子爆弾のことについてお話を聞きました。

いわた がつむいか あさ いえ で こうじょう い
岩田くんのおばあちゃんは、8月6日の朝、家を出てかんづめ工場へ行っ
ともだち たの きゅう ひかり つつ
ていました。友達と楽しくしゃべっていると、急にまぶしい光に包まれて、
きづ した ひと たす
気付いたらがれきの下じきになっていたそうです。いろいろな人に助けても
ぬ で とき だれ あし
らい、がれきから抜け出してにげようとした時に、誰かに足をつかまれました。
いっしょ ともだち ともだち
た。それは、さっきまで一緒にしゃべっていた友達でした。その友達は、ガラ
からだ さ ち とき
スが体じゅうに刺さり、血まみれだったそうです。ぼくは、その時のことを
おも えが いた いた
思い描いてみました。きっととても痛かったです。それでも痛いのをがま
ともだち いっしょ い の おも つた
んし、友達と一緒ににげたい、生き延びたいという思いが伝わってきました。
むね かな おも に ど おも だ
胸いっぴいに悲しい思いがこみあげてきて、きっと二度と思い出したくない
き おも
記おくだらうと思いました。

でも、その悲しい思いは、過去のお話にしてはいけなくて、その悲しかつ

おも つぎ
た思いを次につなぐ、つなげることが大切だということが岩田美穂さんのお
はなし とお つた
話を通して伝わってきました。

ひ ばくしゃ かた き じっさい げん しばくだん へいわ ねが き も
被爆者の方から聞ける実際の原子爆弾のことや平和を願う気持ちは、すご
き ちよう たいせつ はなし おも はなし ひ ばくしゃ
く貴重で大切なお話だと思います。しかし、そのお話をされる被爆者の方
がいなくなってしまうたら、その貴重なお話も聞けなくなります。だからこ
そ、いま まだお話を聞けるぼくたちが本気で聞き、それを受け継ぎ伝えてい
くことが大切なのだと思います。

ねんまえ ひ あと まち ひとびと
78年前のあの日の後は、町や人々はぼろぼろだったはずなのに、「70年
くさき は い いま す ひろしま
は草木も生えぬ」と言われたはずなのに、今、ぼくたちの住む広島には、にぎ
やかなまちがあり、みどり
緑にあふれ、たくさんのえがお
笑顔があります。なぜでしょうか。
それは、ひとびと ぜつぼう まえ む きぼう も つづ
それは、人々が絶望してもみなあきらめず、前を向き、希望を持ち続けたから
だと思えます。

いま せんそう せかい かくへいき せんざい
ロシアとウクライナでは、今も戦争をしています。世界には、核兵器も存在
しています。ほんとう おも ひ
しています。本当になくなるのだろうかと思ってしまう。でも、あの日の
あと ひろしま き も わす へいわ
後の広島の人たちがあきらめなかった気持ちを忘れてはいけません。平和を
ねが かくへいきはいぜつ どりよく じぶん し まわ ひと つぎ
願い、核兵器廃絶のために努力したり、自分が知ったことを周りの人や次の
せだい つた どりよく つ かさ
世代へと伝えたりしていく。こういった努力が積み重なっていったら、いつ
せかいへいわ あ まえ おも
か世界平和ということが当たり前になっていくのだと思います。ぼくもこの
どりよく へいわ あ まえ せかい
努力することをあきらめずにいたい。そして平和が当たり前の世界をつ
くっていきたいです。



たからもの 宝物

ひろしましりつなやましようがっこう うえの みく
広島市立中山小学校 上野 美紅

へいわ とは、せかいじゅう のみんなのたからもの宝物です。ひとりひとりが自分と人と物を大事にして、そして未来に残していくものです。そんな宝物は、昔も、今も、未来でも、決してなくしてはいけないもの、ずっとなくなる事なく続けていくべきものです。

わたしがこのような考えをもったのは、戦争関連のテレビ番組を見てからです。家族をなくしてなげく人、たくさんをうばわれ生きる意味をなくしてしまった人、その人たちの気持ちが痛いほど私に伝わってきました。そして、笑顔でいられる事がどれだけ貴重なのかを思い知らされました。他の国や昔の事でも決して他人事ではなく、自分の事として考えて平和についての思いを大切にしなければならぬと改めて感じました。

私は、平和学習の勉強で大きなしょうげきを受けた話があります。それは、「一番電車」についての話です。

1945年8月6日、広島に落とされた原子爆弾によって、人だけでなく、電車などの乗り物もたくさんの被害を受けました。まどガラスが割れたり、たくさんの電車が爆風でだっ線したりしました。その中で、650形652号だけは少ない傷ですんだそうです。そして翌日の8月7日には電車の修復に取りかかり、たくさんの人たちの協力のおかげで、わずか三日後には己斐から西天満町までの間で運転が再開されました。そして、その電車を運転したのは女学生だったそうです。

私が驚かされたのは翌日に準備に取りかかり、三日後に運転を再開させたことでした。被爆し、大切なものをたくさんなくしてしまった人々が、すぐ

に立ち上がり、広島のために前へ進むことは決して簡単なことではなかった
と思います。私なら、その場のじょうきょうを理解できず、みんなのために
できることを考えるなんて、絶対にできないと思います。それどころかぜつ
ぼうや悲しみに負け、当分動くこともできないかもしれません。しかし、一番
電車の運転の再開に向けて協力した人たちは、わずか一日後に行動してい
ました。私はこの人たちを本当にすごいと思います。一番電車の運転の再開
を知った人たちは復興へのきざしが見え、とてもうれしかったでしょう。復活
した一番電車は人々に元気をあたえたのだと思います。それに、その人たちは
平和を大事にしていたからこそこのような行動ができたのではないでしょ
うか。「平和ではない今、立ち止まっても何も変わらない。だれかにたよる
のではなく、自分のできる事をして復興への一歩をふみ出すんだ。」このよう
な前向きな気持ちが人々の中のどこかには存在したはずです。そんな気持ち
を原動力に広島復興のために努力した人たちのおかげで、今、私たちは
こうしてらせているのだと感じました。

私は、平和というものはだれかの努力で成り立っているものであり、みん
なでつくっていくものだと思います。私は平和をつくってくれた昔の人た
ちの努力を絶対にむだにたくありません。だから、自分たちにできる事を
考え、実行し、平和を守っていく事が大切なのではないのでしょうか。例えば、
戦争のことを正しく知り、身近な人に伝えることも十分自分にできる事だと
思います。戦争は国同士のけんかのようなものです。私自身も日々の生活で
けんかや争いをやめ、他の人の良さを認めていこうと思います。そして、み
んなの宝物である平和を未来に、次の世代に残していくように、私は周りを
笑顔にできるような優しさと希望をもった人間になります。みなさんも一緒
に優しさと希望をもちましょう。そして、宝物を未来に引きつぎましょう。



わたしたちの使命

ひろしましりつわせだしょうがっこう おがわ さとる
広島市立早稲田小学校 小川 暁

1945年8月6日、この日も何げない一日が始まるはずでした。

「ピカッ。」

とつぜん、はげしい光と、体が燃えるような熱波が広島町をおそいました。

こんなとても悲しい出来事からもう、78年が経ちました。実際にひばくし

た方々は年が経つにつれて、減少し続け、ひばく体験を次世代に伝える人も

年々減ってきています。そのため、若い世代が戦争についてほとんど知らない

ようになってしまいました。

そんな時、ロシアがウクライナに軍事侵攻を開始し、今ウクライナからひ

なんしている人があとをたちません。そんな中でロシアが核兵器を使用する

ような動きを見せ、いつ核兵器が使用されるのか分からない世の中になって

しまいました。他の国は、どんなに核兵器がおそろしいのかをまだほとんど知

りません。だから、世界が平和になるためにも、ここ広島から、世界へ広島で

どんなことがあったのか、どんなに多くの人々が苦しい思いをしたのかを発信

する必要があるのです。

ぼくは、今、小学校で楽しい学校生活を送っています。毎日仲の良い友達

と遊んで、毎日おいしい給食を食べて、毎日ベッドの上でねてをくりかえし

ているような生活せいかつをしています。でも、このようなくらしをできない人ひとが世界せかい
中じゅうに何人なんにん、何百人なんびやくにん、いや何億人なんおくにんもいます。毎日一人まいにちひとりで働いてはたら、毎日栄養まいにちえいようを
十分じゅうぶんにとれずに、毎日路上まいにちろじょうでねて・・・。そんな生活せいかつぼくには想像そうぞうできませ
ん。でも、そうやって暮らす人くが本当ひとほんとうにいることは間違いまちがありません。ひばく
者しゃの方もそうです。体からだの一部いちぶが動うごかなかったり、見た目みめで差別さべつされたりして
、苦しい思くるいをした人おもがたくさんひといます。そんなの放ほうっておくはけにはいきま
せん。私わたしたちにできることはないのでしょうか。世界せかいが平和へいわになるのを目指めざ
しているのではないのでしょうか。そもそも平和へいわとは何なんですか。

あなたにとって平和へいわとは何なんですか。

「けんかや争あらそいがない世界せかい。」

「おなかいっぱいご飯はんが食たべられる世界せかい。」

「思おもいやりの気持きもちがある世界せかい。」

人ひとによって「平和へいわ」の意味いみがちがうと思います。ぼくが思おもう平和へいわな世界せかいは、
「一人ひとりの意見いけんも聞ききのがさない世界せかい」だと思おもいます。他人たにんの意見いけんを否定ひていするだ
けでなく、認みとめて聞きいてあげることで、世界せかい中じゅうの全人類ぜんじんるいが平和へいわ、幸しあわせだと思おも
える世界せかいを実現じつげんさせられるようにがんばりたいです。そして実現じつげんさせるため
には、この広島ひろしまで何なにがあつたのかを忘わすれずに、語かたりつぐことがわたしたち広島ひろしま
の人々ひとびとの使し命めいではないのでしょうか。



わたし
私にできること

ひろしましりつうしたしょうがっこう かつおか えれな
広島市立牛田小学校 勝岡 英玲奈

「なぜ自分は生き残ったのか。」

こんな悲しいことを、あなたは考えたことがありますか。

当時24歳だった私のひいおじいちゃんは、爆心地から2キロにある被服支しようで、あの日、被爆をしました。原爆投下後、70年間は草木も生えないと言われた広島地ですが、今では緑豊かで美しい町となりました。今では、原爆が落ちたなんて、想像もつきません。しかし、確かに78年前、原子爆弾はここ広島に落ち、地獄のような焼け野原になっていたのです。私がこのことを実感できたのは、私のひいおじいちゃんの被爆体験を聞いたからでした。

1945年8月6日の朝、ひいおじいちゃんは、建物の中にいました。ピカッと光ってすぐに机に隠れたため、外傷はありませんでした。同じ部屋にいた他の職員は、爆風で飛ばされてきた粉々のガラスが体中に突き刺さり、失明をした人が多かったそうです。

すぐに、生き残った30人ほどの兵隊で救護隊を作り、当時、街の中心だった平和記念公園に向かいました。辺りはまだ煙が上がっていて、すべての人が亡くなっており、死体は黒焦げで、黒焦げの地面と区別がつかないそうです。本川と元安川は死体でいっぱいでした。ひいおじいちゃんは、一日に200体ほどの死体を引き上げて、火葬しました。しかし、まだ数千人の死体が浮かんでおり、それらの大部分の死体を処理するまでに9月の下旬までかかったそうです。その間、30人の救護隊のうち、ひいおじいちゃんともう一人の友人の二人以外の28人は死んでしまいました。

ひいおじいちゃんは、「なぜ自分は生き残ったのか。」と自問して、自分を責めていたそうです。毎年8月になると仕事ができなくなり、一日中飲酒をして、ぶつぶつとつぶやいていたそうです。祖父がつぶやいていることを聞き取ると、「あれは地獄だった。」「もっと知識があれば、あんな戦争は反対した。」「自分の友人は皆犬死にだった。」などとつぶやいていたそうです。

78年前、焼け野原になった、ここ広島で立ち上がった人々。その一人である私のひいおじいちゃんの命がつながって、私は11年前に生まれることができました。

私は、ひいおじいちゃんが「なぜ自分は生き残ったのか」ということに苦悩していたことを知って、とても胸が痛みました。できることなら、「生き残ってくれて私は嬉しいよ。ひいおじいちゃんのせいじゃないよ。生き残ってくれてありがとう。」と伝えたいです。私は、この話を聞いて、二度と原爆を使ってはいけないと強く強く思いました。

そのために、今の私ができることは、78年前の悲惨な状況をできるだけ多くの人に伝えていくことだと考えました。私は、世界中の人達に、広島平和記念公園に来ていただきたいです。そして、これからも原爆の恐ろしさを伝えていきたいと思えます。

「なぜ自分は生き残ったのか。」

私は、そんな悲しい思いを、もう二度と誰にもしてほしくありません。

「おじいちゃん、ひいおじいちゃんが命をつないでくれたからこそ、私は生きていますよ。とても幸せだよ。」

そう言える生き方を私はしていきます。





たちあがるひばくしゃ、たちあがるぼくたち

ひろしましりつおながしょうがっこう こうのたいし
広島市立尾長小学校 河野 泰士

いまねんまえがつむいかごぜんじふんつみひろしまひとびといた
今から78年前の8月6日午前8時15分。罪のない広島の人々に、痛く、
あつくるげんしばくおがいがいとおお
熱く、苦しく、おそろしい原子爆弾が落とされました。ひ害にあった多くの
ひろしまひとびとちながなないの
広島の人々は、血やなみだを流しながら、亡くなりました。生き延びたとして
げんばくしょうびょうきこういしょうくるせかい
も、原爆症による病気や、さまざまな後遺症に苦しんでおられます。世界
みあらそかえさいきん
を見わたせば、争いはくり返されてきました。最近では、ロシアによるウク
しんこうあらそみちか
ライナ侵攻があるなど、いつも争いはぼくたちの身近にあるのです。

じっかんねんせいこうがいがくしゅうひろしまへいわき
そのことを実感したのは、ぼくが5年生のときに、校外学習で広島平和記
ねんしりょうかんいしりょうかんはいかんさむけ
念資料館に行ったときです。資料館に入ったしゅん間に、寒気がぼくをおそ
ひばくなひとびともいひん
ってきました。そこにあったのは、被爆して亡くなった人々が持っていた遺品
しゃしんいひんやくろみ
や写真などです。どの遺品も焼けこげて黒くなっていて、それを見ていると、
いまひばくしゃこえきいちばんいんしょうのこ
今にも被爆者の声が聞こえてくるようでした。一番印象に残っているのは、
げんしばくとうかちよくごひろしまひとびとしゃしんしゃしんいたいた
原子爆弾が投下された直後の広島の人々の写真です。どの写真も痛々しい
おもめえほん
ものばかりで、思わず目をつぶりたくなりました。また、絵本にもなっている
しげるべんとうもぬしくるおもすべ
「滋くんのお弁当」などがあり、それらの持ち主の苦しみを思うと、全てを
みかんせんそうじじつまあ
見ることができないくらい、おそろしく感じました。戦争の事実を目の当たり
せんそうなにつよおもくに
にしたぼくは、戦争は何もよいことがないと強く思いました。どの国において
なんつみななききいた
も、何の罪もない人がたくさん亡くなります。それは、だれが聞いても、痛く、
くる
苦しいものです。

ひばくしゃくるさべつへいわがくしゅう
さらに被爆者を苦しめたのは、差別でした。ぼくがこれまでの平和学習で

いちばんいんしょう のこ
一番印象に残っていることは、へいわ ノートに書かれていた ふじえ きょうこ
藤恵京子さんのお
はなし
話です。ふじえ 妹 は、ひばく 被爆によって てあし かお 手足や顔などを やけど し、あし へんけい
足は変形
してしまいました。そのことで、ふじえ 妹 は、いろいろなところで さべつ
差別
を受けました。ふじえ 藤恵さん自身も ひばく 被爆から なんねん た 何年か経ったときに さべつ
差別
を受けました。がいしゅつさき みち 外出先で 道にまよい、こうばん みち 交番で 道をたずねたところ、しゅっしんち き 出身地を聞かれ、ひろしま
広島と
こた 答えました。すると、「きも わる 気持ち悪い」と さべつ 差別されたのです。このような さべつ
差別
が、げんしばく 原子爆だんで くる 苦しんだ ひばくしゃ 被爆者たちの こころ 心を、もっと いた 痛めつけたのです。さべつ
差別
なくすためには、ひろしま お 広島で起きた おそろしい 事実を、いろいろな ひと 人に伝える必要
があると思います。

いま
今もなお、せかい 世界から あらそ 争いは絶えず、た おお 多くの人々が 苦しんでいます。そんな
せかい すく 世界を救うために、いま ひばくしゃ 被爆者たちは たちあがって おお 世界中の多
くの人々に、ひろしま げんしばく 広島原子爆だんのことを 知ってもらうために、こうえんかい
講演会をされたり、ひろしまへいわ きねんこうえん おとず 広島平和記念公園を訪れた人々や 学校をまわって、ひばくたいけん はな
被爆体験を話したりさ
れています。その ひばくしゃ 被爆者の かつどう 活動の一つひとつが、せかい 世界の人々の こころ 心を 動かす始
めています。せんそう 戦争を たいけん 体験していない ぼくたち にできることは、なん
なのでしょう
か。それは、げんしばく 原子爆だんのことを もっとよく 知り、さらに はっしん 発信していくこと
ではないか と思います。これから ぼくたちは、いろいろな ほうほう 方法で、せかい 世界の 全ての
ひとびと 人々に へいわ 平和の とうと 尊さを うた 訴えかける 必要 があります。うけつぎ 受けつぎ、つた 伝えることをや
めてしまったとき、ひばくしゃ 被爆者の くる 苦しみは わす 忘れられてしまいます。せかい 世界の 恒久
へいわ 実現のために、つぎ 次は ぼくたちが たちあがります。





つた 伝えつないでいく

ひろしましりつだんばらしょうがっこう まつしげ すみれ
広島市立段原小学校 松重 純怜

わたし そうそふ は、とうじ ばくしんち はな ばしょ す
私の曾祖父は、当時、爆心地から7キロ離れた場所に住んでおり、レント
ゲン技師をしていました。その日は休みで自宅にいたところ、突然、目を開け
られないほどのまぶしい光と爆風とともに、広島ひろしまの空そらに「オレンジ色の玉」
が上昇するのを目撃し、急いでカメラを持ち出したそうです。当時はカメラ
を持っている人が少なく、記録にとどめようと必死でシャッターを切ったそ
うです。その時のカメラと写真は、現在、広島平和記念資料館ひろしまへいわ きねんしりょうかんに展示してあ
り、訪れる人たちに当時の様子を伝える大切な資料たいせつ しりょうとなっていることを
祖父から聞きました。

わたし さい とき そふ はじ しりょうかん おとず い たの
私は、10歳の時、祖父と初めて資料館を訪れました。行くまでは、楽
しみな気持ちもありましたが、いざ中に入ると、そんな気持ちなど一気に飛ん
でいき、恐怖で体が震えました。考えられないほどボロボロになった服。
被爆者が体験した、苦しすぎる生活。その時の衝撃は、今でも鮮明で忘れる
ことはありません。今を生きる私たちにとって、想像を絶するほどの残酷な
日々を知り、胸が締め付けられる思いでした。

わたし げんばく おそ り かい
私はこれまで、原爆の恐ろしさについてあまり理解できていませんでした。
けれど、資料館に行ったことで、原爆の残酷さ、悲惨さを知り、戦争に
ついてもっと知らなければと思うようになりました。

そんな中、身近な所でも大変なことが起きていたことを知りました。その
きっかけは、段原小学校で伝え続けられている「助けてあげられなくてごめ
んね」という絵本です。この絵本は、作者の実体験をもとに、原爆により段原
小学校の下敷きになってしまった子どもたちを助けることができなかった
ことへの後悔の気持ちと無念さなどが描かれています。

だんばらしょうがっこう まいとし ねんせい かきゅうせい えほん よ き
段原小学校では、毎年、6年生が下級生にこの絵本の読み聞かせを
します。初めてこの話を聞いた時は、

「いま わたし ぼしよ ひとびと くる な
「今、私たちがいるこの場所で、たくさんの人々が苦しみ、亡くなっていた
なんて・・・。」

と、信じがたい気持ちでした。

ひっし たす たす みず お て あ
必死に助けようとしても助けられず、せめてもと水を置いて手を合わせそ
の場を離れた作者。当時の苦しみを絵本にすることは、どれほど辛かったこと
でしょう。けれど、この絵本が伝え続けられていることで、私はその現実を
し どうじ いま いのち へいわ あらた かん
知り、同時に、今ある命や平和のありがたみを改めて感じました。

わたし ねんせい こんど わたし かきゅうせい よ き ばん ひろしま
私は6年生となり、今度は私が下級生に読み聞かせをする番です。広島
で実際に起きたことを少しでも多くの人に知ってもらえるよう、気持ちを込
めて読み聞かせをしたいです。また、祖父から聞いた話や、曾祖父が残して
くれた写真から私が感じた原爆の悲惨さについて伝えていきたいです。

いま にほん せんそう へいわ す けつ あ
今、日本は戦争もなく平和に過ごせています。しかし、これは決して当たり
まえなことではありません。今この時も、世界では戦争が起きています。苦しみ、
死の恐怖と闘いながら過ごしている人は、少なくありません。戦争は起こら
ずとも、核兵器を保有している国もあります。

へいわ かね か
平和はお金では買えません。だけどみんなで作ることはできます。そのた
めに私ができることは、原爆や戦争の恐ろしさを知り、学び、伝え続けてい
くことです。今の平和な生活は、かつての広島で苦しみを抱えながらも復興に
む た あ どうじ かたがた げんぼく ひさん つた つづ
向かって立ち上がった当時の方々、原爆の悲惨さを伝え続けてくださってい
る方々のおかげです。

おも う つ へいわ みらい ねが そうそふ のこ だんばら
その思いを受け継ぎ、平和な未来を願い、曾祖父が残してくれたこと、段原
しょうがっこう お じぶん う と おも じぶん ことば つた
小学校で起こったことなど、自分が受け取った思いを自分の言葉で伝え、つ
ないでいきたいです。



ひばくち い ぼく 被爆地で生きる僕たち

ひろしましりつみなみしょうがっこう こにし さく
広島市立皆実小学校 小西 咲功

ぼく そうそふ ぼ げんばく
僕の曾祖母は原爆にあって、7才、3才、1才の3人の子どもを失いま
した。3才の男の子が伸一という名前なまえで、原爆資料館げんばくしりょうかんに三輪車さんりんしゃと一緒に紹
介かいされています。日本国内にほんこくないだけでなく、世界中せかいじゅうの人に見ていただいて平和の
とうと うつた
尊さを訴えています。

ぼく そうそふ ぼ あ
僕は曾祖母に会ったことはないけれど、祖父から話はなしを聞かせてもらっ
り、曾祖父の被爆証言ひばくしょうげんのDVDを見せてもらったりしていました。祖父の家
は僕の家から車くるまで15分ふんくらいの近い所ちかところなので、小さい時からよく遊びに
行ったり泊とまったりして、楽しく過たのぎしてきました。小さい時は伸ちゃんしんと
さんりんしゃ
三輪車がうまっていたちい小さなおじぞうさんに、祖父とお参りまいしました。祖父か
ら線香せんこうに火ひをつけてもらい庭にわの花はなといっしょせんこうに線香をあげました。

おじぞうさんのあたま みず
頭に水をかけて洗あらってあげると、祖父は、
「ほーら、こうして水みずをかけてあげるとおじぞうさんが笑わらつとるみたいだろ。」
と見いました。僕ぼくが見てもおじぞうさんは、気持きもちよさそうに笑わらっているよう
に見みえました。

そふ いえ い にわ あなほ たの ひと はじ
祖父の家そふ いえに行いって、庭にわで穴掘りあなほをすることも楽たのしみひとの一つでした。初めはス
コップやくわの使つかい方かたも分わからないので、姉あねに教おしえてもらいました。ある時とき、
ちち てつだ
父ちちにも手伝てつだってもらってみんなで1メートル以上掘いじょうほっていると、土つちの中なかから
さら はへん なんこ いっぺん はへん なんこ
お皿さらの破片はへんが何個なんこか出てきました。一片いっぺんが10センチはへんくらいの破片なんこが何個なんこか
出てきました。祖父が

「これは被爆ひばくしたお皿さらかも知しれない。」

と言って、接着剤でつなげてみると、ジグソーパズルのようにうまくつながって、少しお皿の形になりました。いつもみんなで遊んでいる土の下のこんな近くに被爆したお皿がうまっていたのでおどろきました。土がかぶさっているし、家も新しく建っているし、木もはえているので掘ってみなければ分かりません。

祖父の家は爆心地から1.5キロほどです。小さい時からよくいっしょに散歩をしました。被爆樹木もあるし、原爆でヒビの入った2メートルくらいの石の仏像もあることを教えてもらいながら遊びました。

橋の上から川を見ながら

「原爆の時は、死んだ人が川いっぱいになって、下流に流れて行ったりまた上流に流れて行ったりしていたんだ。川原では死んだ人を山のようにかさに重ねて、油をかけて焼いたんだって。」

と祖父が話してくれました。

この作文を書く前に、曾祖父のDVDを見ました。僕がいつも遊んでいる庭で曾祖父が話していました。曾祖父は、涙を流しながら最後の方で

「原爆は恐ろしいものです。核兵器は廃絶しなければいけない。人類が破滅するということを話しておきたい。」

と、話していました。僕は曾祖父の経験した原爆について、見たこともないし、痛みや悲しみもわかりません。でも、僕が育ってきた土の下にも、まわりにも、原爆は今でも残っていることは知っています。曾祖父があの時死んでいれば、祖父も母も姉も僕も生まれていません。

広島でこんなことがあったんですよ、被爆した人はこんな悲しみを持って生きているんですよということを伝えていきたいと思います。



わたし し せんそう
私の知らなかった戦争

ひろしまいがく ふぞくしょうがっこう みやがき まゆ
広島大学附属小学校 宮垣 繭

へいわ あたた えがお わたし す ひろしま ひろしま ねんまえ
平和で、温かい笑顔がいっぱいの私が住む広島。そんな広島に、78年前、
みんなの笑顔を奪い、日常を壊す出来事が起こりました。

しょうわ ねん ねん がつむいか げんし ぼくだん とうか げんし
昭和20年（1945年）8月6日、原子爆弾が投下されたのです。原子
爆弾は、従来の爆弾とは、桁違いに強力な爆発力を持ち、緑が豊かだっ
たこの広島は、一面の焼け野原へと一変しました。

わたし はは そうそぼ ひばくたいけん き せんそう こわ め そむ
私は、母から曾祖母の被爆体験を聞くまで、戦争は怖いものだと、目を背
けていました。しかし、曾祖母の言葉は、私に強い衝撃を与えたのでした。

がつむいか あさ は ま さお そら ひろ いえ なか
8月6日の朝は、晴れて、真っ青な空が広がったんよ。家の中におったら、
アメリカの爆撃機B29のごう音が何度か聞こえて、外の様子を見たら、B
29からキラキラした箱のようなものが落ちるのが見えて、急いで家の中に
避難して、そのあと、どのくらい時間が経ったんか、本当に思い出せんけど、
ものすごい爆音かして家の窓ガラスが粉々にくづけたんよ。それから何が起
こったんか、全然分からなかったけど、とんでもないことが起きることだけ
は確信できたんよ。

そうそぼ いえ ばくしんち ひじやま
曾祖母の家は、爆心地から6キロメートルでした。しかし、比治山があった
おかげで被害は少なくてすんだそうです。この言葉は、もう亡くなった曾祖母
の口から直接聞くことはできません。でも、今、11歳の私に、母の口から
この出来事が伝わっているのです。私は、曾祖母、母、私の三代でこの出来
ごと う つ いみ かんが なか わたし あら
事が受け継がれている意味を考えました。そうする中で、私には、ある新た
な思いが生まれたのです。「母の次は、私が戦争の実相を伝えなければ。私

が伝えて、この思いをまた感じてもらわなければ。」

このことから、私は、背けていた広島の出来事に向き合うことに決めました。そこには、広島に住んでいた人々が浮かび上がってきました。皮膚がはがれて、骨が見えながらも、ずっと愛する家族を待ち続けた人。黒い雨に打たれながら亡くなった家族を思い、泣き崩れた人。このような苦しみの中に生きて広島の人々を思うと同時に、今の自分の周りを見渡してみました。

今日も当たり前のように、温かい笑顔で見守ってくれる家族。くだらないことでも笑い合える友達。私たちのためにといつも動いてくれる先生。周りの人の笑顔であふれる中で生きる私。あの日の広島の人々は、それとは正反対で、自分がつらい目にあいながら、愛しい人たちを待ち続け、深い苦しみ、悲しみ、孤独感の中で生死をさまよっていたのではないかと思います。

ここで抱いた私の気持ちは、戦争から目を背けるのではなく、正面から受け止めたいというものでした。「平和」は当たり前ではありません。これから被爆者がどんどん亡くなっていき、戦争のことを聞く機会が無くなっていきます。戦争を知らない世代の人々も、私のように、ヒロシマの実相を知ることができたなら、次の世代へと語り継ごうとする思いが生まれるのではないのでしょうか。

戦争の中、傷つきながらも、愛する人が生きていることを信じ、戦争が終わることを願った人々がいたということを未来に伝えていこうという人が一人でも増えてほしい。今現在、世界で起きている戦争や争いは、一日でも早く終わってほしい。私は、世界中の人々が安心してらせる、もっと幸せな世界にしたい。だからこそ、この平和を語り継ぐことが、世界平和への第一歩だと考えます。広島から世界へ。平和を語る一人になります。



へいわ 平和のために今^{いま}できること

ひろしまだいがく ふぞくしのめしょうがっこう
広島大学附属東雲小学校

の がみ わかば
野上 若葉

みなさんにとって、平和とはなんですか。口に出したり、想像したりすることとは簡単ですが、実際に平和な世界をつくることは、むずかしいことではないでしょうか。

しょうわ ねん わたし そふ とうじよんさい げん
昭和20年、私の祖父は当時四才。原ばくドームのすぐ近くに住んでいました。8月6日、まだおさなかつた祖父は、親せきの家にひ難していましたが、いえのこに残っていた両親、二人の姉、1才の弟は、原子ばくだんでなくなりました。一発の原ばくによって、家族も家も一しゅんにして、うばわれてしまったのです。私は祖父から直接話を聞けませんでしたが、たった4才で家族をなくした祖父は、つらくて悲しい思いをしたにちがいありません。私は、つみなひとびと罪のない人々がぎせいになる、特に子どもから家族をうばう戦争は、二度と起こしてはならないと思います。

ねんせい とき はっぴょうかい さくしゃ
5年生の時、発表会でアンパンマンの作者である、やなせたかしさんの生がいをもとを基にしたげきを発表し、私はやなせたかし役を演じました。やなせさんも戦争で家族をうばわれた一人です。げきの中で、印象に残っているセリフがあります。

「なぜだ、日本のために戦ったではないか。なのになぜ。なぜ、一番守らなければならぬいちひろを、守ることができなかつたんだ。正義とはなんだ、人を殺して殺されて何が正義だ。こんな世の中、絶対に間ちがっている。」

やなせさんはそれまで、戦争は正しいことだと思つていましたが、大切な弟をなくした時、自分がやってきたことが間ちがっていたことに気づきました。ひとあらし争うことが正義だと思わせるくらい人をくるわせるのが、戦争のおそろ

しさなのです。

わたし はは いま たいけんでんしょうしゃ め ぎ べんきょう はは たいけん
私の母は今、ひばく体験伝承者を目指し勉強をしています。母が体験を
でんしょう しゃ し みずひろし はなし わたし き
伝承しているひばく者の清水弘士さんのお話を、私も聞いたことがあります。
す。清水さんは、言います。

「もうだれにも、あのじごくを経験させてはいけない。かく兵器は戦争で使わ
れるものだから、戦争をしないように、そしてかく兵器をゼロにするために、
みんなで大きく声をあげてください。」

まさに今、ロシアとウクライナでは争いが起きています。ニュースでも、「か
く」という言葉をよく聞くように、なりました。「かく」のきょうふは私達の
すぐ近くにあるのです。かく兵器が使われないように、みんなが悲しい思いを
する前に、私達ができることは何でしょうか。

まず、知ること。ひばく者の話を聞く。資料館に行く。インターネットで
しら いま し きかい
調べる。今は、知る機会がたくさんあります。

そして、知ったことを想像すること。ひばく者の思いや人の気持ちを想像
し、次の行動を想像する。それはかく兵器が使われた時、世界がどうなるか考
えることにつながります。

最後に伝えること。広島のおも つた じぶんごと かんが
最後に伝えること。広島のおもつたを伝えることで、みんなが自分事として考
え、平和に対する思いを強くしてくれます。私は、まずは身近な友達から、
いずれは、世界中の人に伝えるため、英語を勉強したり手話を勉強したり
しています。

この三つは、広島に生まれた私達ができること、しなければならないこと
ではないでしょうか。ひばく者の清水さんの言葉のとおり、戦争をしないよう
に、かく兵器をゼロにするために、私はこの三つを実行できる人になります。



語り継ぐ ヒロシマ

ひろしま しりつふる たしょうがっこう
広島市立古田小学校

かねさか こうせい
金坂 康誠

1945年8月6日、広島にあの恐ろしい原爆が投下されました。原爆は一しゅんのうちに大切なもの全てを破壊しました。その数は計り知れません。このような被害を出す原爆は、絶対に広島と長崎の二度で止めなければいけません。

「絶対に三度目を許しちゃいけない、三度目許すまじ。」

これは梶矢先生の言葉です。梶矢先生は6歳の時に爆心地から1,800メートルの地点で被爆しました。定年された後、ヒロシマを語り継ぐ教師の会を発足させ、人々に原爆について語ってきました。先生は、

「三度目は許しちゃいけないのです。それを一人でも多くの子どもたちに伝えていきたい。そして彼らが大人になった時、自分の子どもに伝えてくれることを願っています。」

と話されています。被爆者である梶矢先生が願っていることを、僕たちは実現させようと努力し続けなければいけません。そうし続けることで今現在、平和でない国が平和になるかもしれないのです。

昨年、僕は8月6日に向けて、折り鶴を一生けん命折りました。5年生の最初に兵庫県から広島に転校してきたので、鶴を折ったことはありませんでした。折ることが難しいところは、友達に教えてもらいながら折りました。佐々木禎子さんは、原爆の後遺症である白血病からの回復のために、願いをこめて、鶴を折りました。

禎子さんは2歳の時、爆心地から約1,600メートルの楠木町で被爆し、黒い雨に打たれ、6年生の時に白血病と診断されました。入院中、禎子さんは、どんなに痛くても、つらくても、口に出しませんでした。ただただ病

き かいふく ねが くすり かみ み ま ほうそうし つる お つづ
気の回復を願い、薬の紙やお見舞いの包装紙などで鶴を折り続けました。

ぼく さだこ まな へいわ こうえん げんぱく こ ぞう せ
僕は禎子さんから学んだことがあります。平和公園の原爆の子の像には、世
かいじゅう へいわ ねが おお つる とど ひとり お つる いま せ
界中から平和を願い、多くの鶴が届いています。一人が折った鶴が、今や世
かいじゅう へいわ しょう し ひとり おこな せ かい
界中で平和の象ちょうとして知られているように、一人の行いでも、世界
ひろ さだこ はっけつびょう なお
に広がることがある、ということです。禎子さんの白血病は治らなかつたけ
れど、世界中の人に広く禎子さんの願いが受け継がれているのです。

か こ お ひさん せんそう に ど いまげんざい せんそう
過去に起きた悲惨な戦争を二度と起こさないために、そして、今現在、戦争
くる すべ ひとびと ぼく かた つ
で苦しんでいる全ての人々のために、僕たちにできることは、「語り継ぐ」と
いうことです。核兵器の恐ろしさ、戦争のむなしさをしっかりと知り、後世に
かた つ いま ひばくしゃ かた な
語り継いでいかなければなりません。今、被爆者の方が亡くなってきていま
こんど ぼく ばん ひばくしゃ き かた つ
す。今度は僕たちの番です。被爆者から聞いたことを語り継いでいく。それを
こ ぜんいん おこな つづ かくへいき せんそう
ヒロシマの子どもたち全員で行っていく。それを続けることで核兵器や戦争
がなくなると信じています。

ことし がつ にち みっかかん かいさい ゆいいつ
今年の5月19日から三日間、G7広島サミットが開催されました。唯一の
ひばくこく にほん ひばくちひろしま ひら い み
被爆国の日本、それも被爆地広島で開かれたことはとても意味のあることで
かっこく おとず せんそうちゅう だいてうりょう
す。各国のリーダーが訪れ、戦争中のウクライナのゼレンスキー大統領も
さん か ぼく かっこく たち へいわ きねんしりょうかん
参加されました。僕はこのサミットが、各国のリーダー達に平和記念資料館
ほうもん よ きかい おも てんじぶつ み ひばくしゃ
を訪問してもらう良い機会になったと思います。展示物を見たり、被爆者であ
るおぐらけいこ はなし き ひ なに お
る小倉桂子さんの話を聞いたりしてもらうことで、あの日に何が起こったの
か、またまち ぶっこう げんざい つづ ひばくしゃ くる かな み
か、また街が復興してもいまだに現在まで続く被爆者の苦しみ、悲しみ、見え
ない ころ きず じゅうぶん かん おも
ない心の傷などを十分に感じてもらえたと思います。このサミットをきっ
せんそう かくへいき ほうほう はな かくへいき
かけに戦争をなくす、核兵器をなくす方法を話してほしい。核兵器がなくなり、
おびえることなく地球 上 の全ての人々が笑顔になる日が必ずくる。僕は信じ
ています。そして、その日まで、僕もヒロシマを語り継いでいきます。

Commitment to Peace

August 6, 2023

What does peace mean to you?

No conflicts or wars.

Accepting differences without discrimination.

Everyone smiling without bad-mouthing others or fighting.

You can find many kinds of peace all around you.

8:15 am on August 6, 1945—

Ear-splitting explosions and skin-blistering heat.

Blood-covered corpses with skin hanging off their bodies float on the surface of the rivers.

A mother calling her child's name and pleading over and over again *open your eyes, just open your eyes!*

A single atomic bomb destroyed the city of Hiroshima in an instant and filled it with sorrow.

Why was I left alive?

Survivors guilt plagued my great-grandfather.

The atomic bomb left deep wounds in the hearts of those who survived,

and continued to bring them suffering for living.

It has been 78 years since that day.

Today, Hiroshima is a city full of greenery and smiling faces.

Thank you for surviving.

It's because you survived that we were given our lives.

And there is something that we can do for others, too.

Thinking about how others feel before saying how we feel.

Finding the good in our friends.

Doing what we can to make others smile.

Now is the time to unite our will for peace.

We will treat the ardent wish of the *hibakusha* as something personal and use our own words to convey that wish.

We will each take action to pay forward the peace around us.

We, the children of Hiroshima, will build a future that everyone can recognize as peaceful.

Children's Representatives:

Katsuoka Erena (6th year, Hiroshima City Ushita Elementary School)

Yonehiro Tomoru (6th year, Hiroshima City Itsukaichi-Higashi Elementary School)